

第一章 東北地方の塔

第 1 番 金剛山最勝院五重塔—真言宗智山派—

青森県弘前市銅屋町

津軽統一の戦いで戦死した兵士の供養で建立され、しかも重要文化財指定の日本最北端に位置する五重塔が弘前市にあると聞き、巡礼しました。

弘前駅から、津軽富士と呼ばれている岩木山を眺めながらバスで 20 分弱の銅屋町のバス停で下車し、小高い丘に向かって石段を登り、山門をくぐると津軽の林檎の紅に彩られた端正で、どっしりとした五重塔が現れます。もともとこの塔婆は、大円寺が造営したもので明治元年神仏分離令により最勝院が堂塔を引き継いだものです。最勝院は、津軽真言宗五ヶ寺の筆頭で、しかも領内寺社総取締寺でもあり、格式を重んじる弘前八幡宮の別当寺にも任じられており、権威の高い古刹です。



大円寺の六世・京海和尚が、津軽統一の戦のなかで戦死した敵味方の兵士を供養するため、三代藩主・津軽信義の帰依を受けて着工され、両者死去のため中断期間をはさみ、寛文 7 年（1667）、四代藩主・津軽信政のときに竣工しました。この五重塔は、一辺 5.7m・総高 31.2m で、江戸期の他の塔が、細長くて相輪も短く安定感にかけるのに比べ、相輪も堂々としており、バランスが良くて美しい造りになっております。飛騨高山の名工・目屋の竹内彦太夫により、一本の釘も使わずに建てられたといわれています。この塔の安定感は、五層の一辺が初層の一辺の半分の長さに逡減されていることと、相輪の長さが塔身の半分もあることに起因しています。軒は二軒繁垂木とし、組物は和様の三手先です。初層は逆蓮頭勾欄付の縁を廻しており、正面の中央間は棧唐戸、脇間は連子窓とし、他の面の脇間は円形の板連子としています。

桜の季節も紅葉の季節も、とりわけ雪の季節には、奥羽の山々を背景に一段と美しいシルエットを見せてくれます。

第 2 番 日吉八幡神社三重塔

秋田県秋田市八橋本町

秋田市の日吉八幡神社（ひえはちまん）に、初層内部の仏事関係のものを一切取り払い、正面に鹿島大明神とした扁額をかかげて神殿であることを示し、明治の廃仏毀釈令（ハイブツシヤク）による取り壊しを免れた、県内に現存する唯一の仏塔があることを知り、早速訪れてみました。

秋田駅から泉山王循環バスに乗り15分程度の八橋にあります。八橋街道側から入ると、総ケヤキ造りの山門である随神門があり、その正面に豪商青木平兵衛が父の供養のため、棟梁・吉田安左衛門の手で建立された三重塔が立っています。その奥を右に曲がったところに、神殿があります。

日吉八幡神社は、佐竹氏が移封の江戸時代初期に、安藤実季氏が勧進した日吉社と佐竹義信氏の氏神八幡社を合祀したもので、同時に天台宗の寿量院も建てられ、神仏習合の霊場となり八橋（やばせ）の山王さんと呼ばれ、人々の尊崇を集めました。

三重塔は、宝永4年（1707）年に竣工し、基壇の上に擬宝珠勾欄付（ギボシウラツキ）の縁をめぐらし、軒廻りは初層・二層が二軒平行垂木（フタキヘイワキ）で、三層のみ扇垂木とし、組物は三手先（サテサキ）であります。一辺2.7m・総高19.5mで、特徴は、初層に花頭窓（カウマド）を配し、相輪から四方に多宝塔と同じように、鎖がついていることです。



第 3 番 羽黒山五重塔

山形県東田川郡羽黒町

修験道のメッカ出羽三山の一つ羽黒山の杉木立の中にひっそりと国宝の五重塔が立っていると聞き、勇んで鶴岡市に向かって、出かけました。

鶴岡駅から、庄内バスで 30 分・羽黒センターで下車すると羽黒山入り口の随神門が眼に入ってきます。門を抜け、継子坂を下ると、祓川にかかる神橋が見えてきます。更に杉並木を進むと、ひときわ大きい樹齢 1000 年といわれる老杉・爺杉にたどりつきます。昔は婆杉もあったようですが台風で失われてしまっています。塔は、爺杉の横の杉並木の中に立っています。

羽黒山五重塔は、現在、出羽三山神社が奉戴し仏塔であるが祭神を祀っています。出羽三山では、奈良時代後期より月山神を奉じ、平安から鎌倉にかけて盛んとなった神を仏の姿とする本地垂迹思想により神仏習合の修験道が成立しました。全国の修験道は徳川幕府により、京都聖護院本山派、京都醍醐三宝院当山派の二派に統一されたが、古来よりの出羽国羽黒山と九州英彦山は別派として公認されています。開山は、崇峻天皇の子、蜂子皇子との伝承

があります。この塔は、室町時代前期 応安年間（1368～1375）の再建と考えられており、創建は平安中期に平将門の建立と伝えられている。純和様の伝統的手法を守った素木造り・柿葺きの雅やかで、均整のとれた美しい塔で、一辺 4.10m・総高 24.2m です。さらに杉並木を登ること 40 分で、三神合祭殿に着きます。この建物は、月山・湯殿山・羽黒山の神々をまとめてお祭してあり、高さ 28m、厚さ約 2.1m もの萱葺屋根、内部は総漆塗りの特異な造りです。ここまで来ると、霊山の雰囲気は十分に味わえると同時に森林浴も楽しめます。



第 4 番 海岸山普門寺三重塔—曹洞宗—

岩手県陸前高田市米崎町

気仙大工という気仙地区（大船渡市・陸前高田市・住田町）を中心とした多能大工集団が、出稼ぎ先の江戸から技術を修得し、たてたという三重塔が陸前高田市にあると聞くに及んで、早速巡礼しました。

一ノ関駅から、大船渡行きバスに乗り陸前高田駅前下車し、車で15分弱の陸中海岸を見下ろす小高い丘に普門寺はあります。奥州三十三観音霊場第29番札所でもあります。三百五十余年の樹齢をもつ杉の中、参道は代門へと続き、代門を入った正面に本堂があり、本堂を背に樹齢三百年といわれる百日紅の大木に眼をみはります。一時期に寂れたが、浜田城主千葉氏により再興されました。

本堂左手奥の庭園に立つ三重塔は、屋外に建つ指定文化財で最も小規模な禅宗様の塔で、気仙大工の粋が結集された装飾の多い塔婆建築として貴重なものといえます。一辺1.65m・総高12.5mであるが、特筆すべきは、初層の木鼻彫刻や隅尾垂木の龍彫刻等豊富で変化に富み、軒は平行垂木で、二層の軒は宝輪を中心とした浮き彫り彫刻を前面に施した板軒となっており、三層は扇垂木となっています。軒の形式が三層とも異なっているのは、この塔だけです。杉林を背景にした三重塔と枝振りの良い松および池を中心にした庭園の調和が美しいと感じました。



第 5 番 雷雲山法用寺三重塔—天台宗—

福島県大沼郡会津美里町

JR 会津若松駅から只見線に乗り 30 分、無人駅根岸で下車し、20 分ほど田圃の中を歩くと雀林の集落に着きます。ひなびた雀林の村里の坂道を登ったところの山裾に法用寺があります。養老四年に、徳道によって開かれましたが、大同二年に焼失し、翌年に徳一大師が現在の場所に再興しました。鎌倉時代以降、近くにある中田観音や立木観音などとともに会津三十三観音霊場第 29 番札所として栄えましたが、今は訪れる人も稀なようです。

室町時代の建築と伝えられる八脚門をくぐると、正面に観音堂があり、内部には檜の一本彫の金剛力士像や本尊の十一面観音像が祀られています。

境内には、会津五桜の一つである「虎の尾桜」があり、天然記念物に指定され、綺麗な花を咲かすとのこと。

現存する三重塔は、安永九年（1780）に地元大工の棟梁・中山次右衛門、越国仙七によって建てられ、会津地方唯一の木造層塔であります。この塔は、礎石の上に勾欄のない縁をめぐらし、組物は和様三手先を用いており、池をはさんで観音堂の西方に建っています。

心柱は、初層天井裏で止める懸柱式で、一辺 4.12m・総高 19.0m で二・三層には勾欄が無く、禅宗様を折衷しており、軒は初・二層が二軒繁垂木で、三層は扇垂木であります。軒下四隅には、鋭く爪をたてた丸彫の竜頭が、睨みを利かしています。この塔の特徴は、正面を明確に意識さすように造られ、さらに内部に三層まで登ることのできる階段が設置されていることでもあります。江戸期には、信者を上らせ、遠く望める磐梯山や飯豊山、眼前に広がる会津平野の眺めを、参詣者の集客する目玉としていたのかもしれない。



宮大工の知識— I 寺院の建築様式

- ・ 和様

和様とは、鎌倉時代に新しくわが国に取り入れられた大仏様と禅宗様に対する語で、必ずしも日本独特のものを意味するわけではありません。七～八世紀にかけて断続的に輸入された建築様式を基礎に、平安時代を通じて日本化が進んで成立した様式といえます。長押を用い床をはること、また水平性がつよく、おおらかで穏やかな意匠が特徴です。和様の典型的な建築物としては、大報恩寺本堂と蓮華王院本堂があげられます。

- ・ 禅宗様

禅宗様とは唐様ともいい、鎌倉時代前期に禅宗とともに中国から導入された建築技術をもとにした様式で、創建当時の鎌倉建長寺がこの様式であったと思われるが、遺存例はなく、残るのは洗練された鎌倉時代末期から室町時代初期のものであります。堂内を土間とすること、裳階がつくこと、細部に特有の彫刻をほどこすことなどが特徴としてあげられます。禅宗様の典型的な建築物としては、円覚寺舍利殿があげられます。

- ・ 大仏様

大仏様は天竺様ともいい、鎌倉時代の初めに宋から新しく移入されました。福建省など中国の南方の様式を多く取り入れており、禅宗様とは別の流れといえます。東大寺再建にあたって重源が採用した建築様式で、大型建築に対応し得るいろいろな技法を備えており、貫を用いて柱を繋ぎ、強固な構造を造り上げました。建築物としては、浄土寺浄土堂と東大寺南大門が典型です。

- ・ 新和様

従来からの建築様式であった和様に、大仏様の手法を部分的に取り入れた様式をとくに新和様と呼びます。奈良では、鎌倉時代後期以降、和様に代わって新和様が主流を占めるようになった。東大寺再建の現場で学んだであろう大仏様を和様に取り込んでいった奈良の工匠たちが、天平様式の復古調の様式で、諸大寺を復興していきました。新和様の先駆的な例として興福寺の北円堂が挙げられます。

- ・ 折衷様

折衷様は、鎌倉時代末から室町時代の和様の建物に、大仏様や禅宗様の細部技法が取り入れられているものをさします。折衷様の典型的な建物は、明王院本堂で、軒反りは禅宗様の感が強く、正面棧唐戸は大仏様、内部は虹梁を多く使うが、海老虹梁も架かる。細部には大仏様・禅宗様が多く混ざり、いかにも折衷様です。